

合唱道中50年

秋山日出夫

「八 - モニ - 」N013 昭和49年10月

合唱することの楽しさ面白さ、その魅力に取りつかれて、この道を歩き始めて50年になる。道中はずいぶん長かったし、色々苦勞は多かったが、その割にはへこたれもせず、育っていく合唱団への希望と練習の成果に胸を躍らせ張合いを感じながら、1年2年といつの間にか通り過ぎてしまった。振り返ってみると、合唱はこよなく美しく楽しいものと満足している。合唱道中には終点がないのだから、まだまだへこたれずに歩き続けて行こう。古いメンバ - の中には孫が出来た人もいる。本当に嬉しくも楽しい話である。昔のプログラムを出しては思い出の数々を楽しむ事がある。

昭和2年3年国民音楽協会主催の合唱大音楽祭をのぞいて見る。それぞれ10団体そこそこの参加ではあったが、当時としては素晴らしい大音楽祭に違いはなかった。

オリオンコ - ル(男声)、東京リ - ダ - タ - フェルフェライン、横浜混声の名が懐かしく、立教大学、東京美術学校の名前も見える。昭和2年の初ステ - ジ(私は第一テノ - ルを歌っていた)から50年、東京リ - ダ - タ - フェルが現在でも日本の雄として堂々の活躍をしていることを考えて、よくぞがんばったものと、受け継がれた合唱魂の力強さに頭の下がる思いがする。

しかし当時の団体がほとんど姿を消しているのは淋しいことだ。世相の移り変わり、特に世界大戦の渦の中で合唱活動は仮死状態を続けたのだが、終戦から立ち上がった合唱活動は、大衆の心を大きく揺り動かして全国的な運動に発展して連盟組織の結成となったのである。戦前派はもちろんの事、新しく誕生した数多くの合唱団が合唱することの喜びを交換するまでになった、特に職場工場における合唱団の台頭とその真剣な意気込みは目を見張るばかりであった。戦後誕生した合唱団も今日30周年を迎える。いずれもが盛衰を繰り返し繰り返しながらその伝統を築き上げて来ているが、次々と襲いかかる色々な難題に打ちひしがれて散っていく団体もある。

50年前も現在も団体を立派に活動への起動に乗せるための苦勞には変わりがない。団体組織の性格にはそれぞれの特色があり、運営していく心構えにも、世相を反映しながら、充分その特徴を活かした方法がとられなければならないだろう。

どうしたら良い合唱団が作れるか、誰でも考えることだ。美しい合唱、楽しい合唱、その練習の立派な成果の裏には、どんな苦勞努力が積重ねられてきたか。人任せではない、メンバ - 1人1人の結束の賜であることを忘れることは出来ない。

音狂への道

合唱団員の中にはいわゆる音狂と呼ばれて、合唱することこそわが生き甲斐とするほどの強者が必ずいるものだ。もちろん男女の別は無い熱心な人達だから、音楽的にも上達は人一倍早いし、リ - ド役を務めている。仲間同士の間関係への心遣いも細やかで、誰にも信頼されて親しまれる存在である。アマチュア合唱団の存立の鍵を握るほど大切な存在であり、音狂の集団ともなれば合唱団の前途は洋々万々歳である。

合唱することの喜びはメンバ - 同志の思いやりの有る温かい心の交流に有る。この点を無視した技術一辺倒の運行の結果は暗黒への道であろう。音狂はこの大切なポイントを100パ - セン

ト活用することを忘れない。素晴らしいアイデアを提供して、仲間を右へ左へ導きながら、和やかな雰囲気づくりに努力してくれる。そしてその団体独特のカラーを産み出してくれるのである。個性を主張することの多いメンバーの中にあって、合唱することの本意に埋没できる人、これこそ音狂の最たるものである。

初心に帰れ

メンバーが団体に定着するか否か、合唱団の命にかかわる大切な問題である。合唱団ではそのために年間を通じて細心の注意を払わなければならない。せっかく体勢が整ってやれやれと思う間もなく、結婚だ転勤だと年間を通じて繰り返される。誠に苦勞の種はつきないのである。

新入団員獲得のための努力はいずれの団体でも経験されていることだ。あらゆるチャンスを逃がすことなく血眼の奮闘である。新入団員が合唱団の伝統に溶け込んで定着するよう、全員の協力こそ望まれるのである。旧人は新人だった昔に戻った気持で、甘やかすことなく温かく導いてやって欲しい。そして一日も早く堂々と第一線に活躍できるようにする。音狂の腕の見せ所である。

いやな奴

どこの合唱団にも先輩ぶって、わずかばかりの音楽知識を鼻の先にぶら下げて、他を顧みようとしない一人よがりの輩がいるもので、合唱活動に大きな障害になっている。こういう連中は練習にも出席常ならず、華やかな舞台ばかりを夢見ているもので、合唱は一人で出来ないもの、メンバーの協力の賜だということにはおよそ無関心であるようだ。オレがいなければと自らを過信しているのだから始末に終えない。しかし上手にリードすることが出来れば有力なメンバーになり得る人達なのだから、心のハモニの重要さを納得させるよう努力をしよう。仲間から分離してしまっている、かたくなな心を柔らかくほぐしてやりたいものである。

人の振り見て

近頃ではいわゆる合唱シーズン、シーズン外の別なく、色々な形式による合唱演奏会がもたれるようになった。特に大都市における演奏会は驚くほどの数にのぼっている。この恵まれた状況の中にあって、合唱団の人達の大半は、この上ないチャンスを無にしているという事実を淋しく思う。合唱団体の小さな枠の中に閉じこもって歌っていれば楽しいのかと思うとそうでもなく、合唱祭、コンクール等には堂々と出場してくるのだが、他を聴くという意欲を持たない。自分達の演奏が終わればサッサと退場していく。井の中の蛙である。あるコンクールの幕開けの風景。出演者50名が舞台に整列、審査員7名も席についた。聴衆が50名ほど広い会場にきまり悪そうに座っていた。淋しいことである。

想い出の記録

全国にくまなく普及の成果を達成して世界に誇る組織を固め、躍進しつつある全日本合唱連盟もやがて30周年を迎えようとしている。全国の総意をかたむけて素晴らしい記念の事業を達成してみたい。1人1人が目を大きく開いて熱意をかたむけてほしい。30周年を期待しよう。最後に合唱活動に大きな夢を託しながら後輩のために、大きな進路を拓いてくれた先駆者小松耕輔先生の、昭和2年の大合唱祭プログラム巻頭の言葉を記録しておこう。

“音楽は日に月に進んでまいりまして、欧米の著名な演奏家も続々渡来するようになり、最近2・3年間の進歩は誠に目覚ましい状態であります。しかしながら其の聴衆なり演奏家なりはまだ社会の一方の限られておって、必ずしも民衆と深い交渉を持つに至っておるとは考えられません。

欧米諸国の民衆音楽の状態と比較するときは、到底比較にならぬように思われます。美術の方では文部省が主催して数年前より帝国美術院の展覧会が催され、体育の方もオリンピックゲームや明治神宮の競技等が有って其々適当なる方法によって奨励されておりますが、独り音楽に何等の国家的奨励機関も無く社会的設備も出来ておりません。

欧米諸国の例を見まするに、音楽家を養成する音楽学校が人口4・5万の都市には必ず官公立のものがあり、各都市には沢山の民衆による合唱団や管弦合奏の団体があつて或いは競技が行われ、合同の演奏会が行われおります。これ等に比較すると我国には未だ真の民衆的の音楽が存在しないと云つてもよい位のものであります。又目を転じて一般社会の世相を見るに誰でもが感ずる様に、誠に殺伐で殺風景で思想が険悪になり生活が日々砂を噛む様になっております。こういう時代には何を措いても民心の調和を計り、生活を円滑にする油を注ぐ事が必要であると思ひます。以上のような諸点から我々志を同じゅうする者が発起者となつて国民音楽協会を創立し、先ず第一に音楽の社会化運動を計り、更に其の他諸事業例えば国民音楽を機立するための作曲奨励、新人楽人の紹介、音楽上の展覧会、演奏会講演会を次々に開催したい考へであります。そこで本年は其の第一回の事業として民衆と最も直接の関係を有する、合唱大音楽祭を催しその奨励を計り普及進歩を計りたいと考へたのであります。”

当日の審査員の名を付記しておこう。当時楽壇の權威がずらりと並べられている。(他界された方が三分の二)

伊庭孝 田辺尚雄 山田耕作 小松耕輔 沢崎定之 本居長世 堀内敬三 高折宮次
矢田部勤吉 小泉冷 佐藤清吉 門馬直衛 外山国彦 辻順治 梁田貞 高勇吉
榊原直 瀬戸口藤吉 大和田愛羅 中山晋平 増沢健美 小林愛雄 木岡英三郎
鈴木米次郎 多忠亮 牛山充 船橋栄吉 遠藤宏 島崎赤太郎 柿沼太郎 野村光一
近衛秀麿 照井栄三 弘田龍太郎

あらゆる角度から合唱活動のため惜しめない協力をされた方々である。心から感謝を申し上げます。